

# 兵庫教育大学大学院における特別支援教育コーディネーター養成 A Training Curriculum for Special Support Education Coordinator in Graduate School, Hyogo University of Teacher Education

宇野 宏 幸・石橋 由紀子・柘植 雅 義  
Hiroyuki Uno, Yukiko Ishibashi, Masayoshi Tsuge

(兵庫教育大学大学院 特別支援教育コーディネーターコース)  
(Graduate School, Hyogo University of Teacher Education)

**要旨：**兵庫教育大学大学院はリカレント教育の一環として、高度の専門性と実践知識をあわせ持つ特別支援教育コーディネーターを養成することをねらい、特別支援教育コーディネーターコースを開設した。本コースのカリキュラムは、「連携」と「個別支援」の2つの柱から構成され、地域の学校現場での実習と事例に学ぶことを重視していることがその特色となっている。また、コアカリキュラムが設定され、2年間のなかで基礎的な知識・理論を学ぶことから応用・実践へとリエゾンするように授業科目が配置されている。さらに、これらのカリキュラムが実践的であるために、地域の学校と協働した実地修練を取り入れている。

キーワード：特別支援教育コーディネーター、養成、大学院、リカレント教育、連携、個別支援、地域

## はじめに

特別支援教育が展開していくなかで、特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーター）が中心的な役割を担っていくことを期待されている。コーディネーターの養成については、教育委員会が中心となって取り組んでいるところであるが、今後はその専門性をどう高めていくかが課題となるであろう（柘植ら、2006）。兵庫教育大学は、現職の学校教員を対象とするリカレント教育を大学院修士課程でおこなう目的で設立された高等教育機関であるという特色をもつ。コーディネーター候補者として、通常学級、障害児学級や養護学校等を問わずある程度の教員経験を積んでいることが求められていると思われる。言い換えると、コーディネーター業務には、教職に関する一般的な知識や経験にプラスされた専門性が求められている。このように考えると、高度な専門性をもったコーディネーター養成は、大学院レベルでのリカレント教育の対象としてふさわしいものである。このような考え方から、兵庫教育大学では平成18年度に大学院特別支援教育専攻を改組して、特別支援教育コーディネーターコースを新たに開設した。本コースの修了生が、現任校でのコーディネーター活動に加えて、都道府県や市が実施する研修会の講師など、地域における中核的な役割を担っていくことを期待している。本稿では、コース設置の

経緯とその特色について述べてゆきたい。

## 1 設置の経緯

兵庫教育大学では、特別支援教育体制への教育と研究に対応すべく、養護学校に加えて聾学校教員養成のための課程認定を取得するとともに、視覚障害担当の教員が赴任した。また、講座名も平成17年度には障害児教育講座から特別支援教育講座へ変更された。さらに、今後の特別支援教育体制作り積極的に取り組むべく、高度な専門性をもつ特別支援教育コーディネーターを育成するコースの設置構想が生まれた。当初は、専門職大学院への対応も含めて検討されたが、最終的には既存の大学院でのコース新設となった。コースの性質から考えると専門職大学院化がふさわしいと考えられるが、専門職大学院での制度的な呪縛から自由であるというメリットもあるであろう。カリキュラム検討のプロセスでは、平成17年度に専攻科を改組して1年制修士課程の特別支援教育コーディネーター専修を設置した愛媛大学の資料を参考にさせていただいた。

学長裁量経費の配分を受けて、都道府県ならびに政令指定都市教育委員会へ、デマンドサイドが考える大学院でのコーディネーター養成に関する調査をおこない、21の教育委員会から貴重な意見を頂戴できた。その結果、基本構想についてはおおむね好意的な返答を

得た。とくに、実習オリエンテッドのカリキュラムの評価は高かった。しかし、派遣を考えるかという問には、予算的な制約などがあり現実には難しいという回答が多かったのは残念なことである。

本コースは、その目的から入学者を現職教員のみ限定しており、本学大学院コースのなかでも異色の存在となっている。本コースを主に担当する専任スタッフは3名で、ほかに客員教授として川西市立川西養護学校の橋本正巳教諭を招聘している。平成18年度の入学定員6名のところ、入学受け入れ数は11名であった。うち、養護学校教諭が3名、障害児学級担任が5名、通常学級担任が3名であった。平成19年度の入学定員は、10名に拡大されている。平成18年5月には、本学と川西養護学校、川西市教育委員会、猪名川町教育委員会間で「特別支援教育の推進に関する連携協定」を締結した。

## 2 特色

本コースの最大の特色は、地域の学校と協働した実践的なカリキュラムとなっていることにある。これを実現するために、養護学校でコーディネーターとして実績のある教員を客員教授として迎え、学校現場などでの実習や実践的な演習を担当して頂くことになった。また、地域と連携協定を結ぶことでこれら地域の学校を実地修練の場として活用させてもらっている。この協定は、現職教員の学生による地域支援という側面も併せもっており、これに対しての地域からの期待は大きい。

### 2-1 カリキュラム

カリキュラムは、「連携」と「個別支援」の2つの柱から構成されている(図1)。コーディネーターのおもな役割は、その名称から推測されるように、学校内の関係者あるいは学校と保護者・関係機関間の連絡・調整であるが、担任へのコンサルテーションという重要な役割も担っている。このことを考えると、コーディネーターの仕事として、対象児の行動上の課題へどのように対応しゆくのか、学習支援にあたってどのような工夫ができるのか担任教師へ助言することは大きなウェイトを占めることになる。

さらに、2つの柱は階層的に配置されて

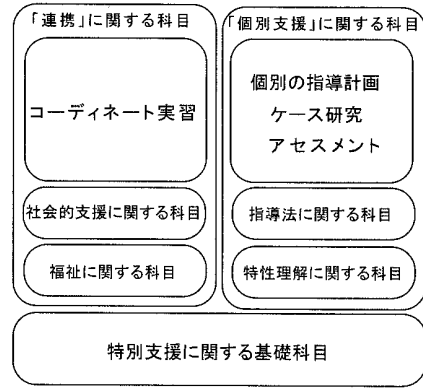


図1 カリキュラムのコンセプト

いる。例えば、「個別支援」に関する領域では、LD、ADHD、高機能自閉症などについての障害特性に関する講義が配置され、その上には演習形式の指導法についての授業がある。さらに、この上にアセスメント演習、ケース実習などが置かれている。このように、基礎的な理論から実践的な演習・実習へシームレスに結びつく配慮をしている。

実習を中心としたコアカリキュラムが組まれている(表1)。開講科目の詳細については、兵庫教育大学大学院特別支援教育コーディネーターコースのホームページ(<http://www.hyogo-u.ac.jp/ssecc/>)を参照されたい。1年次前期の「個別支援アセスメント演習」では、WISC-III、K-ABCや発達検査の実施と評価法について学んだ後、発達障害児を対象として地域の学校で実際にアセスメントをおこなう。また、前期に「学習障害児指導法演習」が開講され、LD児への指導技法について学習する。これらをふまえて、後期には学校現場で対象児を受け持ち、簡単な個別の指導計画を作成して、指導にあたる。この際、定期的にケースカンファレンスがもたれ、担当教員よりスーパーバイズを受ける。

表1 コアカリキュラム

	1年次		2年次	
	前期	後期	前期	後期
「連携」	コーディネーター概論	コーディネーター基礎実習	コーディネーター課題実習	
		コーディネーター臨床演習		
「個別支援」	個別支援アセスメント演習	個別支援ケース実習		
	学習障害児指導法演習	個別の指導計画演習		

さらに、総合的かつ実践的な個別の指導計画を作成していくための「個別の指導計画演習」が開講されている。机上のアセスメント実習にとどまらず、学校現場での実習経験を重視している点は、他のコーディネーター研修ではなされない本カリキュラム上の特色と言える。

「連携」の領域では、1年次前期の「コーディネート概論」でコーディネーター業務の現状と課題について講義を受けた後、後期には「コーディネート基礎実習」で保護者との教育相談、学校コンサルテーションなど実際の活動についての見学実習をおこなう。同時に、医療機関や福祉施設などを訪問して連携先の関係機関の役割について理解を深める「コーディネート臨床演習」が開講される。これらを、受けて2年次前期には「コーディネート課題実習」に入る。この期間は、他の一般の授業を受講せず課題実習に専念することとなる。この実習では、学校現場で担任へのコンサルテーションや保護者・関係機関との連携構築を主体的におこなってもらい、修士論文作成へつなげてゆく。2年次後期は、引き続き大学で授業を受けるとともに修士論文の執筆をおこなう予定となっている。

将来的には、「連携」と「個別支援」の中間に位置する授業として、特別支援教育の観点から授業作りや学級経営をどのようにおこなうかについての科目を設置したいと考えている。また、連携協定を結んで1年目ということもあり、地域の学校での受け入れ体制や指導体制が十分整っているとは言い難いのが現状であり大きな課題となっている。

## 2-2 地域との協働

すでに述べたように、本コースのカリキュラムは地域の学校との協力関係なしには成立し得ない。その調整役を担っているのが川西養護学校であり(図2)、その業務は主として教育相談部の堀内弦太教諭が担当

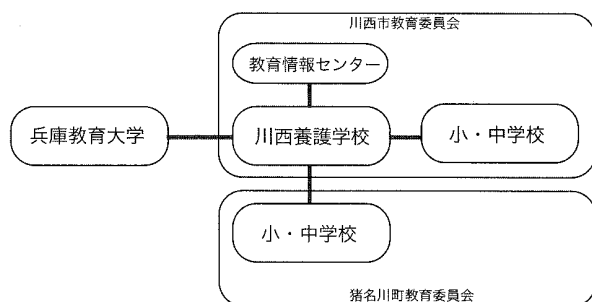


図2 地域との連携関係

している。兵庫教育大学が川西市・猪名川町を連携先とすることにあたっては、川西養護学校にすでにセンター的機能が備わっていたことを考慮した。具体的には、教育相談活動を通して両地域の各学校における特別支援教育の浸透度や子どものニーズを橋本教諭が把握してきたことが大きい。

コース開設に先立って、平成17年度に兵庫教育大学宇野研究室と川西養護学校間で研究・教育に関する連携協定を結んでいた。この連携では、養護学校における個別の学習指導を通して、学校支援をおこなう試みをおこなっていた。図3は、その指導場面で、担任教師も指導の様子を参観していた。単なる学習支援にとどまらず教師の技量や意識の向上を図ることをねらったものである。

教育委員会サイドから考えると、大学と連携協約を結ぶことによって、学校への学生支援を得られるメリットがある。これは、大学にとっても地域支援に貢献できるということでもある。先行して実施されている事例としては、神戸市がおこなっている「通常の学級におけるLD等への特別支援事業」がある。この事業では、

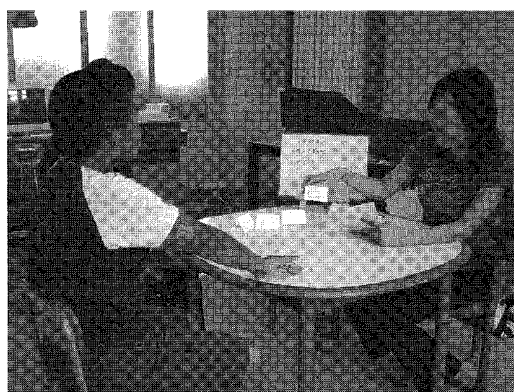


図3 養護学校における個別学習指導

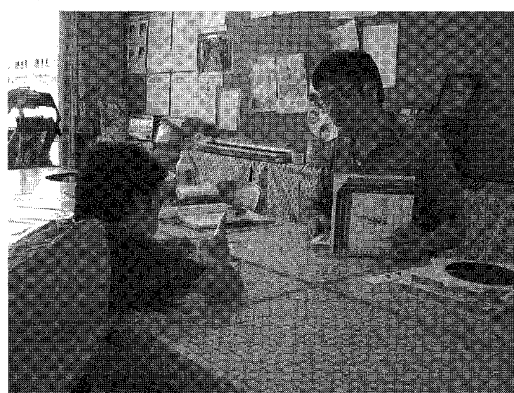


図4 アセスメント実習場面

特別支援教育関係のゼミ学生が大学の指導教員のスーパーバイズのもとニーズのある学校に派遣され支援をおこなうとともに、学校側は卒業論文や修士論文に関わる研究に協力している。

本コースのカリキュラム上で最大の特徴は、地域の学校と協働した実習をおこなっている点にあるだろう。一般的に、研修会や大学の授業でのアセスメント実習はWISC-IIIを受講者どうしで実施してみるというところまでであるが、本コースの場合はさらに学校現場で発達障害児を対象とした総合的なアセスメント（図4）、およびその結果に基づいた指導計画作成までが授業に組み込まれている。さらに、1年次後期の個別支援実習では対象となるケースを担当することになるが、ここではケースによって保護者や受け入れ校の理解、対象児の行動上の問題についての困難度、学校内のリソースが異なってくるため、ケースに合わせた課題解決が必要になってくる。このように、実際の事例に関わる経験を積んでいくことが、学生にとって大きな収穫をもたらすものと確信している。

今後の課題のなかで重要なポイントの一つは、地域と協働した実習をおこなっていくなかで、受け入れ校での学生への指導体制と考えている。特別支援教育についての知識と技量を併せもつ学校教員はまだほんの一握りであるという現状から考えると、地域の学校での実習がどれだけ教育的な意味をもつかという問題に直面している。これを解決していく方法は、大学から地域の学校へ向けての発信をおこなっていくことであろう。例えば、受け入れ校のコーディネーター担当者に大学でおこなっているケースカンファレンスに参加してもらうのも一つであるが、大学の所在地と両地域が離れているという問題もあるので、テレビ会議システムを設置するかインターネットでビデオ配信をするとかの方法を考えていきたい。現状として学校内における対応が一般的であるが、これからは地域の学校間で、事例への対応を含めて様々な教育上の課題を共有し解決していくことが必要である。このような研鑽のなかで、個々の教師の力量を高め、延いては地域の教育力を向上させることが、現代社会で求められているのではないかと思う。さらに、ある程度の専門的な教育を受けた現職の学生が地域の学校へ入っていくことには、当該校における特別支援教育への一層の理解推進に寄与できるという思惑もあるが、実際には様々

な地域事情があるために、その障壁は予想以上に高いと感じている。

### 3 取得できる免許・資格

現在、コーディネーターコースの授業科目はすべて養護学校教諭の専修免許に関わる科目となっており、コースの授業を履修することで養護学校教諭専修免許状の所要資格を得ることができる。また、特別支援教育専攻心身障害コースで開講されている養護学校教諭一種免許関係の授業を受講できるように時間割上の配慮がなされている。

本コースは、特別支援教育士認定協会・日本LD学会よりコース認定を受けており、特別支援教育士資格取得の申請に必要な講習会ポイント36ポイント中の30ポイントをコースの授業科目単位で振り替えることが可能である。現在のところ、平成18年度入学者11名のうち、入学前から日本LD学会に入会していた者が2名、入学後に入会が6名であった。既入会者8名全員が本コース入学後に特別支援教育士資格取得のための講習会に参加登録している。

### おわりに

兵庫教育大学にコーディネーターコースが開設されて8ヶ月あまりが経過した。日々試行錯誤の毎日と感じているが、幸いなことにコアスタッフのまとまりが良く、機動性も結構ある。そして、一期生の学生達も日々悩みながらも授業や学校支援に熱心に取り組んでくれている。年度末には、カリキュラムについて学生や学校現場からの多様な意見を取り入れて、より充実したものに改良していきたいと考えている。

最後に、コース設立に尽力していただいた方々と、コースの運営に協力していただいている学内外の関係者の皆様に感謝の意を表したい。

### 文献

柘植雅義・宇野宏幸・石橋（手島）由紀子 2006 特別支援教育コーディネーター～その役割・養成・実践事例と展望～. 兵庫教育大学研究紀要、29：39-47.